

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

／ホーフスタッターはこう書いている。

反知性主義は、思想に対して無条件の敵意をいだく人びとによって創作されたものではない。まったく逆である。教育ある者にとつて、もつとも有効な敵は中途半端な教育を受けた者であるのと同様に、指折りの反知性主義者は通常、思想に深くかかわっている人びとであり、それもしばしば、チンプな思想や認知されたい思想にとり憑かれていた。反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない。一方、ひたむきな知的情熱に欠ける反知性主義者もほとんどいない。

(リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、強調は引用者)

この指摘は私たちが日本における反知性主義について考察する場合でも、つねに念頭に置いておかなければならないものである。反知性主義を駆動しているのは、単なるタイダや無知ではなく、ほとんどの場合「ひたむきな知的情熱」だからである。

この言葉はロラン・バルトが「無知」について述べた卓見を思い出させる。(バルトによれば、無知とは知識の欠如ではなく、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態を言う。) 実感として、よくわかる。「自分はそれにいてはよく知らない」と涼しく認める人は「自説に固執する」ということがない。他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴いて「得心がいったか」「腑に落ちたか」「気持ち片づいたか」どうかを自分の内側をみつめて判断する。そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人を私は「知性的な人」とみなすことにしている。その人においては知性が活発に機能しているように私には思われる。そのような人たちは単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのこと作り替えているからである。知性とはそういう知の自己刷新のことを言うのだからと私は思っている。個人的な定義

- 問(一) (a) 大量の知識・思想・データで飽和
- (b) 未知の他説を受容しない、無知を以て自説とする
- (c) 他者に議論の余地を与えない

前提条件

だが、しばしばこの仮説に基づいて話を進めたい。

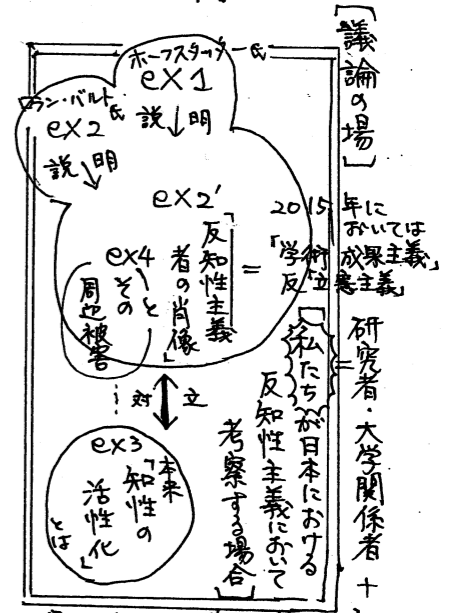
4 「反知性主義」という言葉からはその逆のものを想像すればよい。反知性主義者たちはしばしば恐ろしいほどに物知りである。一つのトピックについて、手持ちの合切袋から、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらかでも取り出すことができる。けれども、それをいくらか聴かされても、私たちの気持ちはあまり晴れることがないし、解放感を覚えることもない。というのは、この人はあらゆることについて正解をすでに知っているからである。正解をすでに知っている以上、彼らはこの理非の判断を私に委ねる気がない。「あなたが同意しようとしても、私の語るこの真理性はいささかも揺るがない」というのが反知性主義者の基本的なマナーである。「あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます」というようなことは残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。彼らは理非の判断はすでに済んでいる。あなたに代わって私がもう判断を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」と私たちに告げる。そして、そのような言葉は確実に「呪い」として機能し始める。というのは、そうとうとを耳元で言うたか言われているうちに、こちらの生きる力がしだいに衰弱してくるからである。あなたが何を考えようと、何をどう判断しようも、それは理非の判定に関与しない」ということは、あなたが何を生きている理由がないと言われているに等しいからである。

私は私をそのような気分させる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。その人自身は自分のことを「知性的」であると思っているかも知れない。たぶん、思っているだろう。知識も豊かだし、自信たっぷりな語り、反論されても少しも動じない。でも、やはり私は彼を「知性的」とは呼ばない。それは彼が知性を属人的な資質や能力だと思っているからである。だが、私はそれとは違う考え方をする。

6 知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだ。だと私は思っている。知性は「集合的教習」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。

7 わかりにくい話になるので、すこしいねいに説明したい。

8 私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重



具体例自体の構図は簡素だが、「誰が」「何を目的に」「話した文章が」が大問題。

社会や学問を集団の知恵で運営(しないこと)について、この文章が筆者が公言する(よ)に政権批判の文章なのは疑いゆがないが、設問に関しては論理展開に即して着実に進めていきたい。

論拠の積み上げ、構成によって成り立つ文章の場合は、「なぜ」の理由説明が出題上表れないことがあるが、これは完全に「罠」と言える。

→ 理屈としての相互の答の関連性が、解答の段階で完成しておかなければならない

設問

- (一) 「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」(傍線部ア)とはどういう人のことか、説明せよ。
- (二) 「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「『あなたには生きていく理由がない』と言われていくに等しい」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」(傍線部エ)とはどういう力のことが、説明せよ。
- (五) 「この基準を適用して人物鑑定を過つたことではない」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で一〇〇字以上二〇〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。
- (六) 傍線 a, b, c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a チンプ b タイダ c ヒンパン

ex4

⑩ 個人的な知的能力は必ずしも高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるといふようなことは現実にはしばしば起こる。きわめてヒンパンに起こっている。その人が活発にこの本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。これまでのところ、この基準を適用して人物鑑定を過つたことはない。

(内田樹「反知性主義者たちの肖像」)

ex3

⑨ ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思ひ出したり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りたくなったり、家の掃除がしたくなったり、たまっていたアイロンかけをしたくなったりしたら、それは知性が活性化したこと、具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことをしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

⑩ 知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかどうかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量できない。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいなくても高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。

要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。

4a 知の自己刷新を集団で行う
 4b 情報を(目で)採取、検討、合意
 4c 周囲・集団での営みに貢献する力
 4d それ何如で個人が評価される